

『源氏物語』における「ゆかし」の考察(二)

北村英子

前稿「『源氏物語』における「ゆかし」の考察(一)」(大阪樟蔭女子大学論集・第二十五号)では、「桐壺」の巻から「花散里」の巻まで十巻の「ゆかし」の用語例を検討してきた。本稿ではそれに引き続き、「須磨」の巻から順次紙幅の許す限り用語例を検討する。

「須磨」の巻では「ゆかし」という語は次の二例見当たる。

○尚侍（むかし）の御もとに、例の中納言の君の私事（わたくしごと）のやうにて、中なるに、源氏「つれづれと、過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん」
さまざま書き尽くしたまふ言の葉、思ひやるべし。

源氏（むかし）の消息文の和歌に「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

源氏は須磨謫居の身でありながら、懲りずに朧月夜に「会いたい」のを塩焼く海人はどう思うだろうと、朧月夜に聞いているのである。

従って、源氏の心の行方はなお忘れることが出来ぬ朧月夜にあり、「会いたく」思う意識が強く働くのである。よって、本断章中の「みるめのゆかしき」で「会いたい」という意義を有し視覚的好奇心を示している。

○弥生（よひ）の朔日（つひ）に出で来たる日（ひ）の日、「今日（けふ）なむ、かく思すことある人は、羨（うらやま）したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。

「須磨」の巻の二番目の用語例には、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

三月の初旬にめぐって来た日（ひ）の日に、源氏は人に御羨を進められたので、海辺も「ゆかしうて」お出かけになる。源氏は癒し切れないう心を、青く美しい大海原の景色へと向ける。従って、この「ゆかしう」は視覚的好奇心で、「見たくて」と意味付ける。

「須磨」の巻の「ゆかし」は二例とも源氏の視覚的好奇心を示し、一例は源氏が朧月夜という女性を恋しく思い、「会いたく」思う意識を喚起し、会うことによって自分の心を充足しようとしている。もう一例は源氏の苦痛な心情を海辺を「見る」ことによって、気分を安定させようとしているのである。

次の「明石」の巻でも、その語は二例見当たる。それは、

○事によれて、心ばせありさまなべてならずもありけるかなと、

ゆかしう思されぬにしもあらず。

一番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

源氏はまだ見ぬ明石の女の、心ばせ・有様が噂どおり並々の人ではないだろうと想像する。それは源氏が明石の女に対して、特別の好意をよせている表われである。聴覚で捉えた噂で、慕わしく思う心情を引き起こし、会って見たいという心情にかられるのである。従って、この「ゆかしう」は「慕わしく(云いたい)」と意味付けするのが相応しく視覚要素が強い。

次の用語例は、

○この常にゆかしがたまふ物の音などさらに聞かせてたまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。

二番目の用語例には、「ゆかしがり」と動詞の連用形で表われる。

源氏は愛着の心を寄せている明石上が弹奏する琴の音を常に「ゆかしがたまふ」のである。が、明石上は一度もお聞かせ申し上げなかったことを、源氏は非常にお恨みなさる。という描写中に表われる「ゆかしがたまふ」は、「聞きたがっていらっしゃる」と意

味付けし、聴覚的欲望を充足したく思うのである。すぐれた楽人と称せられている明石上が弹奏する琴の音は、どんなに格調の高いものか、源氏は次第に好奇心を喚起するのである。音楽に堪能な源氏的好奇心を察することが出来る。

「明石」の巻では二例とも、源氏が明石の君に対して関心をよせ、視覚好奇心を触発している。一例は、まだ見ぬ女を噂で察し、現実感覚を喚起し、極めて強い好奇心を働かせている。二例目は、明石の君がすでに楽人と称せられているという既存の知識から、一度その琴の音色を「聴きたい」と思う、弹奏の技術を探知しようとする好奇心が働くのである。

次の「濡標」の巻では、四例見当たる。それ等を一例ずつ検討すると、

○明石ひとりしてなづるは袖のほどなきに覆ふばかりのかけをしぞまつ

と聞こえたり。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう思さる。

一番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

明石上の「ひとりしてなづるは袖のほどなきに……」の歌を、源氏は読むや否や自然に、待望の女の子である我が子に関心が引き起り、どんなに可愛い早く「ゆかしう」お思いになる。この「ゆかしう」は視覚好奇心で「会って見たい」・「対面したい」と意味付けける。

次の用語例は、

○五月五日にぞ、五十日いかにはあたるらむと、人知れず数かずへたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。

二番目の用語例も、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

姫君は三月十六日に誕生したはずだ。だとすれば、五月五日が生後ちょうど五十日目のお祝の日に当たる。源氏はひそかにお数えになつて、姫君の様子を「ゆかしう」思う。この「ゆかしう」は「見聞したく」と意味付けるのが最も適切であろう。視覚と聴覚の複合好奇心が働こうとしているが、視覚要素の方が強く感じられる。

次の用語例を検討すると、

○あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りがたく、とかくかかづらはむ御歩きなども、ところせう思しなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。齋宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむ、とゆかしう思ひきこえたまふ。

三番目の用語例も、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

齋宮下向は十四歳時、今は二十歳である。どんなに成人なきったか、源氏は「ゆかしう」思う。この場合の「ゆかしう」も「会つて見たい」と意味付けし、視覚好奇心を惹起し、それを充足したい気持ちになるのである。

次の用語例は、

○帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しとおぼいたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つききはひ、あてに気高きものから、ひぢぢかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、

さばかりのたまふものを、と思し返す。

四番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

この場面は、母御息所の病気の傍に侍した齋宮の様子を、源氏は御几帳の帷子が片側に押しやられた所から興味深く隙見をする。齋宮は頬杖をついて、母御息所の病をいたくもの悲しそうな面持ちでいらつしやるのが、ちらつと見えた。それは大変うつくしく、肩に御髪がこぼれかかっている様子、頭の格好や感じはあてに気高く、小柄で愛敬づきでいらつしやる様子のはつきりお見えになり、源氏は心ゆらいで「ゆかしき」気持ちにおなりになる。という叙述描写である。この「ゆかしき」は「会つて見たい」と意味付けし、ちらつと見えた美しい齋宮の御髪・頭の格好・小柄な御様子が次々に見えるにつけ、源氏は会いたい見たい感情が高ぶる。源氏は愛くるしい女性に対して興味を覚え、美的好奇心を感興し、それを視覚で知覚したいと思うのである。

「濡標」の巻を以上の如く検討すると、四例とも、「ゆかしう」思・さる。「ゆかしう……思しやる」「ゆかしう思ひきこえ」「ゆかしきにも……思し返す」というように視覚好奇心を示す語に「思う」という語を伴い、「会いたく・見たく」「思う」心情を表わしている。それらは全て源氏が小柄な女性に愛執を抱き関心をよせている。もう少し詳細にみても、一番目二番目の用語例は父が子に抱く愛情の好奇心であり、又、二番目三番目の用語例は幼女の人間の成長に関心を示し、四番目は齋宮を女としての感情を抱き心を引かれているのであるが、「ひぢぢかに愛敬づきたまへるけはひ」という

叙述がある如く、齋宮は小柄な女性である。従つて、四例とも小柄な女性に対し、劣つた様子ではなく優れた想像の基に美的好奇心を働かせている。

次の「蓬生」の巻においても、「関屋」の巻においても、「ゆかし」という好奇心を示す語は皆無であつた。

「絵合」の巻では六例を認めた。それは、

○前齋宮 別るとではるかにいひしひとこともかへりてものは今ぞ
かなしき

とばかりやありけむ。御使の禄品々に賜はず。大臣は御返りをいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず。

一番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

源氏はこの御返事を「いとゆかしう」とお思いになる心情かられるが、一方で理性が働き、「ゆかしう」と女別当によやお申し出にならない。ここで源氏の意識が制止するのである。この場合の「ゆかしう」は、「御返りを（和歌）」とあるところから、当然「目で読みたい」ことを希求する視覚好奇心が働き、「見て（知りたい）」と意味付けるのが最も相応しい。

次の用語例は、

○事のついでに、齋宮の下りたまひしこと、さきぎきものたまひ
出づれば、聞こえ出でたまひて、き思ふ心なむありしなどはえ
あらはしたまはず。大臣も、かかる御気色聞き顔にはあらで、
ただいかが思したるとゆかしさに、とかうかの御ことをのたま
ひ出づるに、あはれなる御気色あさはかならず見ゆれば、いと

いとほしく思す。

二番目の用語例は、「ゆかしき」と名詞形で表われる。

源氏は、朱雀院が齋宮に懸想する心があることを聞いて知りつつも、そのような素振りをみせず、朱雀院が前齋宮をどうお思いか「ゆかしき」が増す。そして、齋宮のことを口にしては、朱雀院の心の底を觀察し、その心理の揺れを感じし、深い愛情がありながら、隠し隠し朱雀院の心中を詮索する源氏の心理の様子がみられる。

さて、このような叙述描写中の「ゆかしき」は、朱雀院が語るのを聞いたたり、朱雀院の心理の揺れを見たりして、朱雀院が齋宮に示す愛執の深さを源氏が知りたく思うのである。従つて、「見聞して（知りたい）」と意味付けるのが相応しく、視覚聴覚両様を伴なう好奇心である。

次の用語例は、

○めでたしと思はししみにける御容貌、いかやうなるをかしさに
かと、ゆかしう思ひきこえたまへど、さらにえ見たてまつりた
まはぬを、ねたう思はず。

三番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

これは前に示した二番目の用語例の連繫文である。

源氏はかつて齋宮を隙見し、ちらつと見えるその御様子の美しさに心が揺らいで、会つて見たい好奇心をかきたてていることは、既に「濡標」の巻の四番目の用語例でみてきたが、この用語例におい

ては、朱雀院が美しい人と、深く思いを寄せていらつしやる齋宮の御器量は、いったいどのような美しきなのか、源氏は、院の心の底を凝視するにつれ、「ゆかしう」思ひなざるが、とても拝見することが出来ないのを、妬ましく憎らしくお思ひなざる。という叙述描写中の「ゆかしう」は、源氏が、齋宮に直接会つて、どんなに美しい人であるか見て確認したいという好色心をみせている。従つて、「ゆかしう」は「見たく」と意味付けし、視覚による美的好奇心を奮い起こしているのである。

次の用語例は、

○藤壺「兵衛の大君の心高きは、げに棄てがたけれど、在五中將の名をば、え朽さじ」とのたまはせて、宮、

藤壺 見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をのあまの名をや

沈めむ

かやうの女言にて、乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尽して、えも言ひやらず。ただ、浅はかなる若人どもは死にかへりゆかしがれど、上のも、宮のも、片はしをだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

四番目の用語例は、「ゆかしがれ」と動詞の已然形で表われる。

物語絵合せの勝負の描写である。絵の方面に関しては理解が浅い若女房達は、この絵合の成り行きを「死にかへりゆかしがれど」と、極めて強い好奇心で表現されている。そして、主上付きの女房も中宮の女房も、この絵合の片端さえ覗くことが出来ない程、中宮はたいそう絵合を内秘になきつたとあり、若い女房達が我慢出来ないぐ

らい、絵合の成り行きに対して興味を誘発する心理が感取出来る。「死にかへりゆかしがれど」は「死ぬ程見たがるが」と意味付けし、絵合に対する若い女房達の旺盛な視覚好奇心を示している。

次の用語例は、

○その世に、心苦し悲しと思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御心に思ししことも、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々磯の隠れなく描きあらはしたまへり。草の手に仮名の所どころに書きませて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。誰も他ごと思はず、さまざまの御絵の興、これにみな移りはてて、あはれにおもしろし。よろづみなおしゆづりて、左勝つなりぬ。

五番目の用語例は、「ゆかし」と形容詞の終止形で表われる。が、青表紙の数本では「ゆかしく」、又河内本では「ゆかしう」とある。本稿では「ゆかし」と考え論を進めていく。

左方から最後になって出品された一巻の絵は、源氏の須磨謫居の絵日記である。この絵巻には、その地の景色・浦々や磯等を、漏れなく描いており、漢字を草体にして仮名がところどころ書きませてあり、正式の詳しい日記ではなく、感動をもよおす歌等もまじってゐるのは、この残りの巻々も「ゆかし」と、衆人の目を引きつける。この源氏の卓越した一巻により、議論の余地なく左方の勝利に定まる。源氏のずばぬけた絵の名手ぶりが描写されている。即ち、この「ゆかし」は優れたものへの憧憬の念を示す好奇心である。意味は「見たい」と訳し、視覚が働く。

次の用語例は、

○そのころのことには、この絵のさだめをしたまふ。源氏「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ」と聞こえさせたまひければ、これをはじめ、また残りの巻々ゆかしがらせたまへと、源氏「今つぎつぎに」と聞こえさせたまふ。

六番目の用語例は、「ゆかしがら」と動詞の未然形で表われる。

この叙述描写は、前の五番目の用語例と深くかわりがある。即ち、源氏の卓越したあの絵日記は、源氏自ら「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ」と申し上げ、中宮に献上した。藤壺の中宮はこの絵の初め、又残りの巻々を「ゆかしがらせたまへ」とお思いになる。そして、源氏の絵の堪能さ、延いては、当時の源氏の生活の様子を残らず知りたいと思うのである。従つて、この「ゆかしがらせたまへ」は、「ごらんになり(知りたく)お思いなさる」と意味付けし、藤壺宮の旺盛な、視覚好奇心が窺われる。

「総合」の巻の六例を以上の如く検討してみると、一番目・二番目・三番目の三例の好奇心を抱く主体者はすべて源氏で、女性を好色心から愛執する心理がみられ、四番目・五番目・六番目の用語例の好奇心を示す主体者は、女性および衆人であり、三例ともこの巻の素材となっている絵について関心を示している。そして、これ等六例とも視覚的好奇心を示している。

では次の巻に移る。「松風」の巻を調査したがその用語は一例も見当たらなかった。

次に「薄雲」の巻では二例を認めた。それは、

○源氏「さらばこの若君を。かくてのみは便なきことなり。思ふ心あればかたじけなし。対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見ならはせて、袴着はかまぎの事なども、人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。

一番目の用語例である。この用語例文中には「ゆかしがる」と動詞の連体形で表われる。

源氏は明石で生まれた我が子、明石の姫君の行く末を案じて、「紫の上は以前から姫君のことを耳にして、いつも『ゆかしがる』から、しばらくの間紫の上に世話をさせて、袴着等も内々のことではなく、ちゃんと言いたいと思う」と、明石の上にまじめにご相談なさるのである。源氏の心中は姫君を引き取ることである。一方、紫の上は明石の姫君の噂を、あちこちから聞くにつけ、好奇心が日に日に増し、まだ見ぬ噂の源氏の娘と、実際対面してみたい心情にかられる。即ち、この「ゆかしがる」は「見たがる」と意味付けし、視覚的好奇心を働かせている。

次の用語例をみると、
○明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、おぼつかならず人は通かよはしつづ、胸つぶるることもあり、また、面だたしくうれしと思ふことも多くなむありける。

二番目の用語例は、動詞の連用形で表われる。明石の入道の心中である。「さこそ言ひしか」は、「松風」の巻に「この身は永く世を棄てし心はべり、……今日永く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こ

しめすとも、後の事思しいとなむな。避らぬ別れに御心動かしたまふな」とつき放すように言っている。この決別の言葉を指す。明石で入道はこのような決別の言葉を吐きながらも、源氏の御意向や明石上に対する御様子を、「ゆかしがり」なさる。そこで、都の事情が分かるように使いの者を何度も何度も通わせては情報を聞き「胸つぶる」思いがしている。これは先に示した用語例、「薄雲」の巻の一番目と関係があるが、明石の姫君を二条院へ渡したことによるものであり、又、姫君の袴着のことを聞いては「面だたしくうれし」と思ったりしている。明石の入道は、親が子を思う愛情が深いところから、明石上と姫君の様子、そして源氏の御意向を大変気に掛けている心情が窺える。

結局、本用例文中の「ゆかしがり」は「知りたがって」と意味付けるのが最も適切であるが、この描写は、明石と都との距離の隔りから、使者を通じて情報を得ている。よって、「聞いて(知りたがる)」のである。従って、この知覚は聴覚的要素が強く、聞くことよって、自己の気掛かりな満たされぬ心情を充足させようとしている。聴覚的好奇心が働こうとしている。

さて、「薄雲」の巻では二例とも動詞形で表われる。一方は、話し手源氏の言葉を介して、紫の上が明石の姫君を直接「見たがっている」という望みを間接的に明石上に伝えられ、その実現を待つ。一方は、明石の入道が使者を介して、源氏の御意向や、明石上に対する様子を間接的に「知りたがり」その実現を望んでいる。二例とも、親が娘を愛でる親心から表出した好奇心と言えよう。

次の「朝顔」の巻では、その語は一例のみ認める。それを示すと、
○あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前裁の心はへも
ことに見たされて、のどやかにながめたまふらむ御ありさま
容貌もいとゆかしくあはれにて、え念じたまはで、
この用語例中に、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

朝顔の君が住んでいる寝殿の西側の庭の描写である。枯れかかった庭の植込みの風情も格別に見わたされて、心静かに姫君がお暮らしの御様子や御容貌も源氏は「ゆかしく」しみじみとした感情におなりになる。源氏は朝顔の君の美貌を想像して懸想めき、「ゆかしい」感情にかられる。この用語例中の「ゆかしく」は「見たい」と意味付けし、色めいた視覚的好奇心を示している。

次に「少女」の巻に移る。「少女」の巻には、その語は三例見当たる。それ等を逐次検討すると、

○大殿腹の若君の御元服のこと思しいそぐを、二条院にてとせど、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ、なはやがてかの殿にてせさせたまつりたまふ。

一番目の用語例は、「ゆかしげに」と形容動詞の連用形で表われる。夕霧十二歳の元服の描写である。最初は源氏の自邸である二条院で取り行う予定であったが、葵の上の母・夕霧の祖母が、元服の儀式を「ゆかしげに」していらいっしやるので、三条院で式を挙げようとしている。この「ゆかしげに」は、「見たがって」と意味付けし、大宮は孫の夕霧が立派に成人したその晴れ姿に対し、好奇心を高ぶらせ、儀式を「見たそうに」する心情を表わしている。この視覚的

好奇心は、劣った人・みすばらしい人に対して向けられたものでなく、立派な人に向けられた快感的視覚好奇心である。

次の用語例をみると、

○内大臣「……………ゆかりむつび、ねじけがましきまにて、おととも聞き思すところはべりなん。さるにても、かかることなんと知らせたまひて、ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをませたこそはべらめ。幼き人々の心にまかせて御覽じ放ちけるを、心うく思うたまふる」

二番目の用語例は、「ゆかしげある」と動詞の連体形で表われる。

内大臣の言葉である。「血縁ある者同士の馴れあいの結びつきは、正しくないことで、源氏が聞いても不愉快に思われるでしょう。そうさせるにしても、夕霧を雲井雁の婿にしたいがと私にお知らせ下さっても、殊更に待遇をし、少しは他人が見ても『ゆかしがられる』ようなところがあるようにしたいのです。」と現代語訳出来ようが、この「ゆかしげある」を、現代語に置き換えると、「奥ゆかしげのある」「趣のある」と直せよう。「見たい」でも、「聞きたい」でもなく、他人から見、関心のある様子を示し、稀な例である。これも視覚が捉える快感的心情である。

次の用語例は、

○大宮「御事により、内大臣うちのおととの怨うらみじてものしたまひにしかば、いとなんいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にも思はせたまひつべきが心苦しきこと。かうも聞こえじ、と思へど、さる心も知りたまはでや、と思へばなん」

三番目の用語例は、「ゆかしげなき」と形容詞の連体形で表われる。

大宮の言葉である。「あなたのことで、内大臣が怨み言をおっしゃっておられたので、とてもお気の毒です。『ゆかしげなき』ことをお望みなさって、人に心配をおかけするのがつらく思われます。」と語る。その中に使用されている「ゆかしげなき」は、「人が聞いても」感心できない」と意味付けし、従兄弟同士の恋愛や結婚を指しており、第三者が聴覚で捉える不快感的心情である。

さて、「少女」の巻の三例を検討してみたが、一番目の用語例は、立派に成人した晴れ姿に対し、視覚的好奇心を働かせている。後者の二例は、会話文中にいずれも表われ、血縁のある者同士の恋愛や結婚に対して、他人が知った場合の心情の捉え方を意味している点で、共通性を示している。一方は視覚が捉える快感的意味し、一方は聴覚が捉える不快感情を意味している。

本稿では「須磨」の巻から「少女」の巻までの十巻の「ゆかし」について検討した。

(統)